

作風からの舞踊創作 —作者が捉えた作風—

高橋和子
足立美和

【目的】舞踊経験が様々な大学生、院生が各々振付者になり、作風からの舞踊創作を行う試みは、①生活経験を生かし作風を捉え新しい作り方に新鮮さや面白さを感じ、②各振付者は積極的に作品づくりに取り組み、創作過程にも個性が発揮でき、③振付者と踊り手の関係は親密的、援助的である事が、明らかになっている(高橋和子「作風からの舞踊創作の試み」体育学会第46回大会資料95年)。

今回はこの創作において、作者が各作風をどの様に捉え表そうとしたかを知る事が目的である。

【方法】

1. 対象授業 94~96年度本学半期集中合同授業・大学院共通指導計画論「表現教育の指導計画」・学部「表現基礎パフォーマンス」

2. 作品創作 1) 作品数: 60作品

2) 作風: 作者は12の作風から好きな作風、踊り手を選び「どうすればその作風らしくなるか」を考え振付け(踊り手の助けを受けてもよい)。

3) 創作時間: 20~45分とし、作者が完成したという時点で同じ条件でビデオ撮影した。

3. 分析方法 作者が捉えた「作風のミニマムエッセンシャルズ(大切に事)」の記述内容を、松本千代栄の「舞踊表現の構造と要素」で分析。

【結果と考察】

1. 選ばれた作風(表1参照)

作者は作風の解説文を手掛かりに作風を選択したが、選ばれた作風は分散している。特に多かったのは「感覚的」で、これは舞踊創作前に授業の一貫として、感覚の覚醒や身体知覚、自然や人との関わりをメインにした宿泊体験を実施した影響とも考えられる。次に多いのは「幻想的」「抽象的」「叙情的」「力動的」である。少ないのは「構成的」「技巧的」「自然的」であり、舞踊経験が少ない事、技術や構能力、全体の見通しが無い事、自然な感じの表現の難しさ等が選択されない理由と思われる。

表2	主題	身体	運動	変化連続構成	群化(踊り手)	効果(物・音)	情調(作品)	鑑賞
①感覚	感覚(精神分裂)	五感(感覚器)	感じたまま	ゆっくり	人と関わる	既成概念ない音	抽象・暗示的	爽快感
	自然(風・光)	心の中の感じ	二つの質の違い	大きさに	感動を伝えあう	声も出して	全ての一体感	理屈より感覚
②幻想	情景を描く	手の表情	柔らか	ゆっくり方向性	情景を描く			神秘的
	夢の数々	空気分子	流れる・揺らぐ	繰り返し	イメージを浮かべる			
③抽象	抽象的	心を無	縦横の動き	デフォルメ				奇妙・シンプル 様々な解釈色がない
	馴染みのない	無表情						
④叙情	哀しみと喜び	表情豊か	柔らか・ゆったり		出来るだけ自由に			
	孤独・混沌	手体伸びやか	感情のまま直接		各々の思い大切に			
⑤力動		呼吸の一致	力強く攻撃的	対戦をベース	全員が生きる	野性的リズム	力動的イメージ	
			複雑な動作なし	単調を持続		曲のイメージ		
⑥写実	無関心な人		直線的・流れる		踊り手楽に踊る	布で抽象的		
	二人の縁		パーペルを持つ					

また男性は「抽象的」「感覚的」「力動的」を選び、女性は「幻想的」「叙情的」を選んだ。一般的に男性は理性的で抽象的思考や力強さを好み、女性は感情的でロマンティックな思考を好む等と言われ、作風選択にも同様な事が言えた。

以上、選択された作風は、感覚や感情や力強さという本人にとってより直接的なものであった。

表1	①感覚	②幻想	③抽象	④叙情	⑤力動	⑥写実
作品数	11<5>9<1>	8<5>8<2>	6<3>5<2>			
%	18.3	15	13.3	13.3	10	8.3

他: ⑦宗教⑧視覚⑨劇⑩構成⑪技巧⑫自然 * <男性>

2. 作風を捉える上でのミニマム・エッセンシャルズ(表2)

作者が作風を捉える上で大切に事柄を分析した結果、次の様な傾向が見られた。「感覚的」では感覚や自然をテーマに、感じたままを踊り手同士関わって、鑑賞者にも感覚的に捉えてほしい事。「幻想的」では情景や夢を思い描き、柔らかで流れる様な動きをゆっくりと神秘的に。「抽象的」では抽象的で馴染みのないテーマを無表情でシンプルに踊り、見る者に様々な解釈を与える。「叙情的」では孤独や喜び等の感情をテーマに、表情豊かに感情のまま直接的に各自の思いを自由に大切に。「力動的」は攻撃的で力強さを単純な動きで、「写実的」はテーマによって動きが異なり、「宗教的」は祈りという非日常を統一感をもった祈りの動きで厳かに神秘的に、「視覚的」は列や配置を考慮し分かりやすく、「劇的」は突然の変化を対比した動きで劇的に表現する事が、大切にされていた。

以上の事から、作風の解説文の内容が、多くの作風の主題や運動や情調に相当影響を与えている事、「感覚・幻想・叙情」的ではゆっくりな動きや展開が、叙情的では表情豊かに抽象的では無表情に、写実的では様々な主題に応じた動きや筋が要求されていた事などが分かる。

【結論】

1. 多く選ばれた作風は「感覚」「幻想」「叙情」「力動」的で感覚や感情などに直結するものであった。

2. 作者は作風の解説文の影響を受け、主題や運動、情調を捉えており、選ばれた動きの質感や作品の展開が共通する作風もあった。